水垂
史談会報
平成30(2018)年
6月発行 垂水史談会
第30号

【報告】

○ 平成三十年度 垂水史談会総会報告

一．実施日 平成三十年四月十五日（土）
　　午後二時〇〇分～三時〇〇分
二．参加人数 史談会会員 十九名
三．総会会場 垂水市民館二階 第一研修室
四．総会進行 水口光則理事

●総会では町田洋一会長のあいさつ、尾脇市長、坂元教育長が来賓祝辞。その後、協議に入り、平成二十九年度経過報告と決算報告、そして平成三十年度の年間計画と予算案が全会一致で承認。また役員改選については新しく会長に伊集院統氏、副会長に水口光則氏他が選出・承認された。

　さらに町田洋一前会長へは、長年にわたる功績に対して伊集院新会長から感謝状が手渡された。

●総会閉会の後、大会議室に移り、大福コンサルタント株式会社調査部文化財調査課の倉本るみ子氏により「平成二十九年度高城跡発掘調査の概要報告」、および鹿児島高専非常勤講師重久淳一氏により「高城跡の縄張りについて」の公開講演を開催した。

　講演では、調査区の発掘による①空堀に比高差約１９ｍから投げ落とされたかもしれない礫（れき）約２０数個、②ふいごの羽口、漆製品、鉄製品、北宋銭（治平元寶）、炭化米等、③輸入陶磁器の白磁片や青磁片、国内他地域からの搬入品（すり鉢など）の出土品について説明があった。

　また高城跡の特徴として①切り立ったシラスの空堀が非常に長く、他に類例を見ない、②空堀に掘られた顔絵も類例がない、③空堀の掘削に使用した工具痕がはっきりと残るなどの調査結果から、「高城は南九州型城郭が導入される以前の城郭か、もしくは全く異なるプランを持つ城郭と考えられる。肥後氏と思われる築造者も含めて周辺をさらに調査する必要がある」との報告があった。

　講演には地元の水之上地区住民のほか、発掘に携わったスタッフや郷土史に興味を持つ方々等、多くの参加があった。

○ 垂水市長へ表敬訪問とお願い文書提出

　5月9日、┐┐時半から垂水史談会の総会報告・新役員紹介等のため、市長室へ表敬訪問を行いました。併せて歴史文化資料館の建設についてのお願い文書を提出しました。（左「）

　伊集院会長、水口副会長、町田洋一前会長、瀬角事務局長が参加。尾脇市長不在のため、長濱副市長に対していただきました。

平成3┘年5月9日

垂水市長　尾脇　雅弥　様

垂水史談会会長　伊集院　統

歴史文化資料館の建設について（お願い）

地方自治発展のため、日夜奮闘されていることに心より敬意を表します。

さて、標「 の歴史文化資料館建設については、先の平成二十八年十一月十四日に「歴史文化資料館建設を求める請願書」を垂水市議会に提出いたしましたが、その意を十分にお汲み取りいただいた結果、同年の十二月議会にて採択していただいたところです。

ところで、垂水市においては新たな市庁舎建設に向けて鋭意、努力を傾注されておられると聞き及んでおります。

つきましては、　市役所の部署の移転や改変等の際に当たっては、是非上述のことを斟酌され、私どもの長年の宿願である歴史文化資料館の建設・設置についてこれまで以上に積極的なご配慮をしていただきますようお願い申し上げます。

なお、歴史文化資料館の建設・設置について、垂水史談会の案を添付いたしますので、よろしくご検討くださいますようお願いいたします。

【研究ノート】

― 協和小学校時代の思い出話 ―

町田　洋一

　根占町（現南大隅町）の高原地にある滑川小学校が私の初任校であった。そこから二校目の垂水市協和小学校に赴任してきたのは、今からおよそ六十年前の昭和三十五年四月であった。当時の協和小学校校区の様子について思い出を書いてみる。

　赴任当時学校の場所は、以前「ホテルなぎさ荘」（現在は営業停止中）があった場所である。綺麗な海が眼前に広がり、校庭には藩政時代の松並木の大木が何本も残り、校歌にもある「緑に映える江の島」が望見される美しい環境であった。現在はブリやカンパチの養殖業が盛んになった一方、水泳は出来なくなった。

　その頃海潟の漁業は「八田網」とか「とんとこ網」とかの小型底引き網漁法が中心で、カツオ漁の生餌「タレクチ（カタクチイワシ）」を獲っていた。孟宗竹で作った大きな竹籠（中俣の大薗さんが作っていた）に活かしておき、それを枕崎などからカツオ船が買いに来た。カツオ漁には生きているタレクチが不可欠であるからである。タレクチ以外の小さいアジなどの小魚は砂浜に干して「にぼし」（イデザコと言った）にして販売していた。海潟から中俣にかけて、砂浜には延々と広範囲に干し場があり日光で干し上げてよいニボシが出来た。

　多くのカツオ船がやってくると、乗組員は温泉や飲み屋が多く

ある海潟に上陸するのが楽しみで、小学校の校庭で野球などをすることもあったが、夜の温泉場は賑わったものだった。小学生には風紀上問題があるので、学校ではよく「温泉場の近くでは遊ばない」と週の努力目標が決められるものだった

当時は「ハマチ・カンパチ養殖業」もなく、綺麗な海であった。現在は舗装されて漁港になり漁協の建物などがある付近は「和田浜」と言って白い砂のなぎさがずっと続いていて、澄み切った綺麗な波が打ち寄せていた。

学校の下の海では月曜日になると鹿児島市からデパート勤務の若いピチピチの美女達が、まぶしい水着姿で泳ぎにやって来た。当時デパートは月曜日が休みであったし、鹿児島から海潟まで垂水丸の直行船がいた。今では「へそ」を出すくらいの水着でもおどろかないが、休み時間に子ども達と楽しく見物をした。当時は学校にプールが無かったので、学校前の綺麗な海で水泳指導が行われた。近くには「貸しボート屋」（川畑さん）があったので、事故防止にボートを借りて監視したものであった。

学校は古い木造校舎であったが、（昭和三十九（１９６４）年に現在の場所に移転した）児童数はおよそ八百名で各学年三クラスずつあった。市内の学校では二番目の規模であった。男の子どもたちは、驚くほどおおらかで元気があり過ぎ、言葉つかいも荒く私に「オマヤ　ドッカア　キタトヤ」（お前は　どこから　来たのか）と聞かれてびっくりした。先生に対しても「オマヤ」と言っていた。赴任した時、教頭先生から「一学期間は子どもの前で白い歯を見せるな」（笑顔を見せるな）と指導を受けた。それは、元気な子どもが多いので、優しい態度で子どもに接すると、今頃言われる「学級崩壊」になるので、なめられないように厳しく恐れられるくらいの態度で指導せよということであったらしい。

もう一つの注意は、家庭訪問の時「ロッベモチ」が出される、食べると中の「黒糖アンコ」が飛び出し、服を汚すので気をつけろ、というものであった。（現在このロッベモチはあまり作られていない）

児童は活発で元気があり、スポーツも盛んであった。市内のソフトボール大会では、大規模校の垂水小学校に勝ってよく優勝旗を持ってきた。戦前、鹿屋市で肝属郡の陸上競技会があり、協和は競走種目ではダントツ早かったそうである。

私がいた頃のＰＴＡ総会で、ある会員が「最近の学校は勉強、勉強ばかり言っているが、もっと運動に力を入れよ」という、今では想像できないような面白い発言もあったことを憶えている。

大潮の時期になり潮が引くと、学校下から江の島まで砂州ができて歩いて渡れることができた。校長の許可を得て全校児童が一斉に浜に出て、貝（江の島貝といっていたがタイラギでは）や小さいタコを取ってきた。それを用務員室で大きな鍋で炊いて食べるものであった。

また、学校下の砂浜からは魚がよく釣れた。釣り好きな先生は江の島荘の下の浜を掘るとゴカイが簡単に採れたので（時には担任の子どもに掘らせた）餌にして魚釣りをした。リール棹で浜から投げると魚（小鯛）が面白いほど沢山釣れた。勤務時間内に魚釣りをして、教頭から注意を受けたボッケな先生もいた。現在では考えられない自由な学校の雰囲気であった。

また、夏になると「海潟キャンプ村」が開設され、市内外から多くの人々がやって来て賑わった。事務所は中学校の講堂が事務所となりキャンプ村の村長さんもいた。松の木や枝に沢山のちょうちんが提げられ、夜は明るく過ごすことができた。江の島にはいくつものバンガローが建てられ、テントも張られ宿泊できるようになっており、炊飯用具を貸し出す業者もいた。江の島に渡るときは櫓こぎの船が往復してくれた。櫓を漕ぐ人は「竹下牛若丸」（竹下電器）という人だった。（牛若麿ではないか）

現在温泉はどこにでもあるが、海潟は当時、大隅半島唯一の「温泉場」として、県下でも有名な観光地・保養地であり、歓楽地でもあった。温泉ホテルも海潟荘、江の島荘、桜州館、江洋館、上ノ原温泉などがあった。食堂も二軒ありスナックや飲み屋も多かった。一時パチンコ店も川沿いにあった。

先生方も人数が多く、スポーツや飲ん方がはずんだものだった。授業がすむとバレー練習、そして用務員室でノンカタと囲碁。そうして、今ではもう時効となったが、ほろ酔い運転で自宅へ帰って行くのに、だれも咎めるものがないのんびりした時代であった。

この協和小学校で五年間楽しい学校生活を過ごしたが、異動で僻地の学校に行くように命じられ、内之浦の二級僻地の船間小学校に転勤となった。

定年まで多くの学校を勤務してきたが、当時の自由な社会的な背景もあるが、一番楽しかったのは協和小学校時代であった。

川上忠實（周賢）墓碑について　③　瀬角龍平

元和九年公召忠實使伊勢貞昌言之曰忠仍老矣嗣子忠弘尚少汝宜輔翼之賜以佩刀其後忠弘君質於東都於是時忠仍君欲廃忠弘君而立庶子為嗣忠實諫不聴反以為讐遂召忠實因逼手斬之卒終於城中時元和九年六月三日也君以永禄六年癸亥生至是年六十有一矣墓在于城南太平山福壽寺法諡曰周賢居士

【読み下し】

①元和九年、公、忠實を召し、伊勢貞昌をして之れに言わしめて曰く、②忠仍は老いたり、嗣子・③忠弘尚お少し、汝宜しく之れを輔翼（ほよく）すべしと。賜うに佩刀（はいとう）を以てす。その後、忠弘君は東都に④質（ち）たり。是の時に於いて、忠仍君は忠弘君を廃して庶子（しょし）を立て、嗣（し）と為さんと欲す。忠實諫（いさむ）れども聴かれず。反（かえ）って以（もっ）て讐（あだ）と為し、遂に忠實を召し、因って逼（せま）りて手づから之れを斬り、卒（つい）に城中に終う。時に元和九年六月三日なり。君は永禄六年癸亥を以て生まれ、⑤是の歳に至り、六十有一（いち）なり。墓は城南太平山福壽寺に在り。法諡（ほうし）を周賢居士（しゅうけんこじ）と曰う。

【注】

① １６２３年
② 垂水島津家第４代・久信（相模守）
③ 垂水島津家第５代
④ 江戸
⑤ １５６３年

―（以下次号）―